

甲南女子大学蔵本江戸中期書写『源氏物語』について

——帚木・須磨（後半）・篝火の巻——

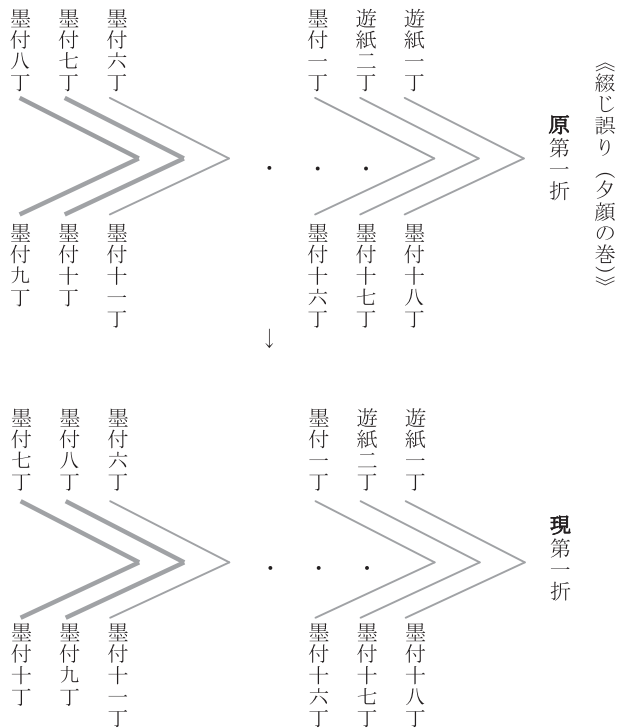
甲南女子大学図書館が所蔵する、江戸中期書写『源氏物語』は、かつて本学の非常勤講師を務めていらつした吉永孝雄先生（浄瑠璃・文楽研究者。元羽衣短期大学学長）より、本学図書館に寄贈されたものである。この該本については、昨年発行した「甲南女子大学大学院論集 第十一号」にて、須磨の巻の前半部分と初音の巻を考察した論文を掲載した。今回は、帚木の巻、須磨の巻の後半部分、篝火の巻を取り上げ、検討していきたいと思う。

一、甲南女子大学本の書誌

該本（甲南女子大学本）は、縦二十四・二種、横十七・六種の四ツ半本。列帖装。表紙は、焦げ茶色の布貼りの紙で、その材質から、昭和になって付け替えられた後補表紙であると考えられる。表紙の中央には無地の題簽があるが、何も書かれていない。見返しは、手透き風の白い和紙。

また、夕顔の巻について、前号に載せた夕霧の巻に続き、綴じ誤りが見つかった。該本夕顔の巻の一折目の九枚目・十枚目が、本来の順番とは逆に綴じられていた。該本墨付七丁、八丁、九丁、十丁が、それぞれ本来の八丁、七丁、十丁、九丁に相当する（下図参照）。この綴じ誤りは、夕霧の巻と同様、昭和になって合冊本にされた際のものと考えられる。

野見山 亜沙美・竹内 彩
松木 綾子・田川 千尋



二、帯木の巻

該本の帯木の巻は、二折で、一折目は十四枚、二折目は十二枚（それぞれ、二十八丁、二十四丁、全五十二丁）。巻頭に三丁、巻末に一丁の遊紙がある。巻頭三丁目の遊紙中央に、墨流しの題簽があり、「帯木」と書かれている。題簽は、縦約六・一糎、横約三・一糎。墨付は四十八丁。朱点、朱筆はなし。また、補入が一ヶ所あり、墨付二十四丁裏の七行目に、

山かつのかき^ほあるともおりくにあはれはかけよな

というような補入がみられた。墨の濃淡が本文のものとは異なっている（写真A参照）。

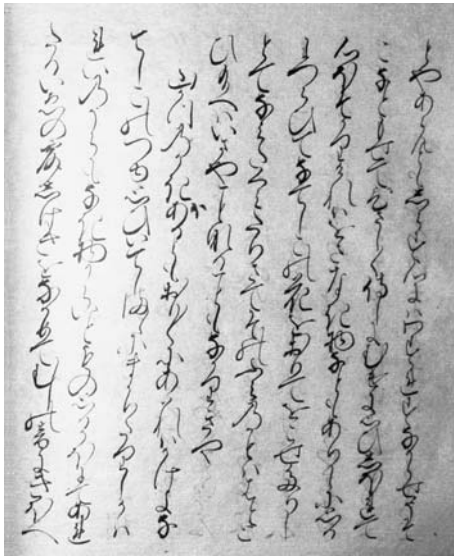


写真 A 帯木 墨付二十四丁裏

まず、該本を翻刻し、『新編日本古典文学全集』⁽¹⁾（以下「全集本」とする）の本文と比較したところ、計一八ヶ所の本文異同があった。その中から、本稿では、

墨付二十五丁表二行目「咲ましる花はいつれとわかね共猶とこなつにしく物ぞなき」

について検討・考察していきたい。

また、該本がどのような性質を持っているのかを考察する過程として、帯木の巻で使用した現行の注釈書や諸本を先に列挙しておく。

- ・『新編日本古典文学全集20 源氏物語①』（底本、大島本）**全集本**
- ・『新日本古典文学大系19 源氏物語 一』（底本、明融本）**新大系本**
- ・『日本古典文学大系14 源氏物語 一』（底本、書陵部蔵三条西家本）**旧大系本**
- ・『新潮日本古典集成（第十三回） 源氏物語 二』（底本、明融本）**集成本**
- ・大島本（『大島本 源氏物語 第一巻』）**大島本**
- ・三条西家証本（『日本大学蔵 源氏物語 第一巻』）**三条西家証本**
- ・尾州家河内本（『尾州家河内本源氏物語 第一巻』）**尾州家河内本**
- ・高松宮家本（『高松宮御蔵河内本 源氏物語 一きりつほ は、き、うつせみ ゆふかほ』）**高松宮家本**
- ・陽明文庫本（『陽明叢書国書篇 第十六 源氏物語 一』）**陽明文庫本**
- ・歴博本（『国立歴史民俗博物館蔵 貴重典籍叢書 文学篇 第十八卷（物語3）』）**国立歴史民俗博物館本**
- ・保坂本（角川書店『源氏物語』CD-R）**保坂本**

墨付二十五丁表（写真B参照）

る氣色むかし物かたりめきておほえ持し

咲ましる花はいつれとわかね共猶とこ夏に

しく物ぞなきやまとなてしこをはさしをきてま

つちりをたになとおやの心をとる

うちはらふ袖も露けきとこ夏にあらし吹

そふ秋もきにけりとはかなけにいひなしてまめ

くしくうらみたるさまも見えずなみたをもらしおと

してもいとはつかしくつ、ましけにまきはしかくして

つらきをもおひしりけりとみえむはわりなくくる

しき物と思ひたりしかは心やすくて又とたえ

(波線・太字筆者、以下同じ)

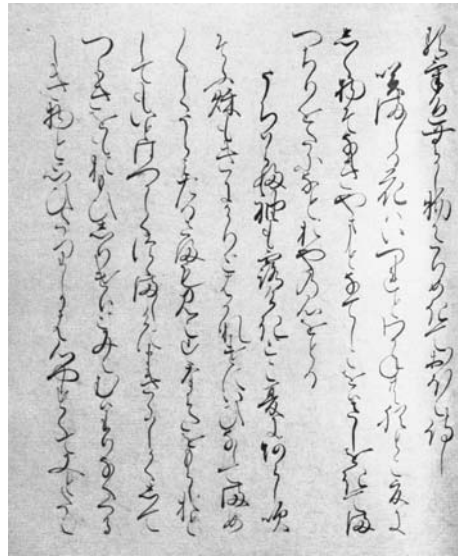


写真 B 帚木 墨付二十五丁表

五月雨の降り続くある夜、宿直で宮中にいた光源氏のもとに、頭中将や左馬頭、藤式部丞が訪れ、女性の品評が始まる。いわゆる「雨夜の品定め」である。その中で、頭中将は内気な女との思い出を語る。

今回取り上げる該本墨付二十五丁表二行目の「咲まじる花はいつれとわかね共猶とこなつにしく物そなき」は、この「雨夜の品定め」において、頭中将が語った夕顔との思い出話の中に出てくる和歌である。頭中将は、夕顔との間に女兒を一人もうけていたが、頭中将は長らく彼女たちのもとを訪れていなかった。その頭中将のもとに、夕顔から便りが届く。この和歌は、その便りを見て、彼女のことを思い出

した頭中将が、久しぶりに夕顔のもとを訪れて、庭を眺めながら詠んだ歌である。

該本波線部に相当する現行の注釈書や諸本の本文は、次の通りである。諸本の本文は、影印または翻刻を確認できたもののみを挙げる。(以下、須磨・篝火の巻も同様)

全集本

咲まじる色はいづれとわかねどもなほとこなつにしくものぞなき

旧大系本

咲まじる花はいづれとわかねどもなほ常夏にしくものぞなき

新大系本

咲まじる色はいづれとわかねども猶常夏にしくものぞなき

集成本

咲まじる色は何れとわかねどもなほ常夏にしくものぞなき

大島本

さきまじる色はいづれとわかねとも猶常夏にしくものぞなき

三条西家証本

さきまじる色花本はいづれとわかねともなをとこなつにしく物そなき

尾州家河内本

さきまじるいろはいづれとわかねともなをとこなつにしくものぞなき

高松宮家本

さきまじる色はいづれとわかねとも猶とこなつにしく物そなき

陽明文庫本

さきまじるいろはいづれとわかねともなをとこなつにしく物そなき

国立歴史民俗博物館本

さきまじるはなはいづれとわかねともなをとこ夏ろのしくものぞなき

保坂本

さきまじる色はいづれとわかねともなをとこなつにしく物そなき

該本の傍線部「咲まじる花はいつれとわかね共猶とこ夏にしく物そなき」の本文は、全集本では、第二句が「色はいづれと」となっている。この歌は他本では、多くの本において、全集本と同じ「いろ」という本文を持つ。該本と同様に、「はな」という本文を持つ本は、旧大系本・国立歴史民俗博物館本・池田本・肖柏本・穂久邇文庫本・御物本・國冬本の七本である。

この歌について、「はな」と「いろ」では、どのような解釈の違いがあるのかを考えたい。該本にも記す「はな」の場合、咲きまじっている「はな」が「いつれとわかねとも」となり、「咲きまじっている花は、どれがよいと区別つかないが」という意味になる。下の句の「とこなつにしくものそなき」というのは、上の句において花に主眼が置かれていることを考えると、「常夏の花に及ぶ花はない」という意味になり、「咲きまじっている花は、どれがよいと区別つかないが、やはり常夏の花に及ぶ花はない」という歌であると解釈できる。

一方、「いろ」の場合、咲きまじっている「いろ」が「いつれとわかねとも」となり、「咲きまじっている色は、どれがよいと区別つかないが」という意味になる。下の句については、上の句において色に主眼が置かれていることから、「常夏の色に及ぶ花の色はない」という意味になり、「咲きまじっている色は、どれがよいと区別はつかないが、やはり常夏の色に及ぶ色はない」という歌であると解釈できる。

現行の注釈書においては、どのように解釈され、訳されているのだろうか。「はな」となっている旧大系本では、頭注において「前栽に咲き交っている花（夕顔と娘と）」は、どちらがよいと、優劣の区別はないけれども、私にはやっぱり、常夏（夕顔）に勝っているものは、どうしてもない。」となっている。「いろ」となっている全集本では、「いろいろに咲いている花の色は、どれが美しいと区別がつかないけれども、やはり、常夏—あなたに及ぶ花はないのですよ」という訳になっている。「とこなつ」には、植物の常夏という意味以外にも、「とこ」という音に「床（寝床）」にかけて「床を共にした女性」を指すこともあるため、「夕顔」を「とこなつ」に例え、「夕顔に及ぶものはない」という訳がされている。

現行の注釈書を踏まえ、夕顔を常夏に例えて解釈すると、「はな」の場合、「咲き

まじっている花は、どれがよいと区別つかないが、やはり常夏の花であるあなた（夕顔）に及ぶ花はない」という解釈になる。一方、「いろ」の場合では、「咲きまじっている色は、どれがよいと区別はつかないが、やはり常夏の花の色であるあなた（夕顔）に及ぶ色はない」という、人を花の色に例えるといった不自然な解釈になる。このように、該本にも記す「はな」の本文の方が自然に解釈できる。

また、古注を見ると、「さきまじる」の歌について、注がついているものは、『雨夜談抄』『細流抄』『明星抄』『岷江入楚』『首書源氏物語』『湖月抄』『源氏物語新釈』の七種であった。そのうち、『首書源氏物語』以外の六種の注釈書に、

(ア)『雨夜談抄』（源氏物語古註釈叢刊 第四卷 明星抄 種玉編次抄 雨夜談抄より）

さきまじる花はいつれとわかねとも猶とこ夏にしく物そなき

さきまじる花とは秋の庭のさまなり しく物そなきとはむる心ナツなから床のえんにていへる也

(イ)『細流抄』（源氏物語古註釈叢刊 第七卷 内閣文庫本 細流抄より）

さきまじる さまじる花とは秋の庭のさま也其中にとこ夏は今女にたとへて云也夕顔上をなくさむる也しく物そなきとはほむる心也又床の縁

もあるへし秋の七種の中とこ夏其一也

(ウ)『明星抄』（源氏物語古註釈叢刊 第四卷 明星抄 種玉編次抄 雨夜談抄より）

咲まじる さきまじる花とは秋の庭のさま也 其中に床夏トコナツは今女にたとへて云なり 夕顔ナツの上を慰るなり しく物そなきとはほむる心也 又床

の縁もあるへし 秋の七種の中床夏一也

(エ)『岷江入楚』（源氏物語古註釈叢刊 第十一卷 岷江入楚 第一巻より）

返哥頭中将

咲まじる花はいつれとわかねともなを常夏にしく物そなき

頭中将哥なり私云是は夕顔上よりなてしこを折て山かつのかきはある ともとよみてをくられしその返哥をはし給はてすなはち頭中将夕顔の

上の家へおはしてさきの山かつの哥の返哥を直にの給也さて又夕頁の上の嵐ふきそふ秋も来にけりと又よまれたりとみゆ此義いつれの抄にものせず如此心得てをきて沙汰にもをよはさる歟不審

(傍線筆者、以下同じ)

というように書かれていた。⁽⁶⁾この六種の注釈書では、どれも「はな」の本文を採用している。このように、「さきまじる」の歌について注がついているもののほとんどが、該本にも記す、「はな」という本文を持つということは、古来この歌は「さきまじるはなはいつれとわかねともなほとこなつにしくものそなき」という本文で広く読まれていたと考えられるだろう。

「さきまじる」という語句が、和歌においてどのように詠まれるのかを見てみると、その語句が含まれる和歌を、六九首見つけることができた。その中で、『源氏物語』が書かれたとされている時期よりも、確実に前に詠まれたと言える歌は、

(一) このはちるそらにたつなみ秋なればもみちにはなもさきまじりけり (興風集)

(二) わがやどのかきねのくさにさきまじるはなの色こそうすくみえけれ (輔親集)

の二首で、いずれも「はな」や「はなのいろ」が「さきまじる」と詠まれている。『源氏物語』以降の歌を見ても、ほとんどが「はな」若しくは「はなのいろ」が「さきまじる」と詠まれている、その多くは「さきまじるはな」「さきまじるはなのいろ」と詠まれている。「さきまじるいろ」と詠まれた歌はほとんどなく、鎌倉時代までを見ても、

咲きまじる色の千草のから錦まがきにさらすこ夏のはな (爲家集)

の一首のみである。咲きまじっている色を詠む場合には、(一)の歌のように、「…

のいろ」の形をとることが多いようである。

加えて、この「さきまじる」という語句についてだが、『源氏物語』以前の用例では、『うつほ物語』に二例見られるのみで、それ以前には見出せない。この「さきまじる」歌は、『うつほ物語』の先例を踏まえていると考えてもよいだろう。和歌においても、前述の(一)(二)のように、「さきまじる」という語句が詠まれている和歌が二首存する。特に、『輔親集』の大中臣輔親については、彼は紫式部と共に中宮障子に仕えていた伊勢大輔の父ということから、(二)の輔親の歌が紫式部の耳に入るといったことも充分考えられるだろう。興風・輔親の二首にしても、『うつほ物語』にしても、「さきまじる」のは「はな」「はなのいろ」となっていることから、「さきまじる」という語句は、「はな」若しくは「はなのいろ」と共に使われる語句であると考えられる。

今回考察した「さきまじる」歌は、現行の注釈書では、多くの写本に「いろ」とあることから、「いろ」の本文を採用し、現在では、「さきまじるいろはいつれと…」という本文で読まれている。しかし、前述したように、古来この歌は、「はな」という本文の方が、広く読まれてきただろうこと。和歌において「さきまじる」という語句が詠まれる場合、「はな」や「はなのいろ」と一緒に詠まれることが多いということ。咲きまじっている色が詠まれる際には、「さきまじる…のいろ」という形を取ることがほとんどで、「さきまじるいろ」とは、ほとんど詠まれないということ。さらに、この歌に詠まれた女性が、常夏や夕顔の花に例えられ、「常夏」や、後に読者によって「夕顔」と呼ばれているように、人を花に例えることはよくあることだが、花の色に人を例えることは不自然であるということ。

以上のことを踏まえると、「いろ」という本文よりも、該本にも記す「咲まじる花はいつれとわかね共猶とこ夏にしく物そなき」の本文の方が、より自然に解釈できるのではないだろうか。

三、須磨の巻

前号も載せたが、該本の須磨の巻は、四折で、一折り目から四折り目まですべて七枚(それぞれ十四丁、全五十六丁)。巻頭に二丁、巻末に二丁の遊紙がある。巻頭の二丁目の遊紙の中央に、墨流しの題簽があり、「須磨」と書かれている。題簽は、縦約六糧、横約三・一糧。墨付は五十二丁。朱点十八ヶ所、朱筆や補入はない。

今回考察する部分は、この須磨の巻のほぼ中間にあたる二十六丁から巻の最後の五十二丁までとする。まず、該本を翻刻し全集本の本文と比較したところ、計二十五ヶ所の本文異同があった。⁹⁾今回はその中から、

墨付二十八丁表五〜六行目「入道の宮は東宮の御事をゆかしうのみおほし、に」について考察・検討していきたい。

また、該本がどのような性質を持っているのかを考察する過程として、今回須磨の巻で使った現行の注釈書や諸本を先に列挙しておく。

- ・『新編日本古典文学全集21 源氏物語②』(底本、大島本) 全集本
- ・『新日本古典文学大系20 源氏物語 二』(底本、大島本) 新大系本
- ・『日本古典文学大系15 源氏物語 二』(底本、書陵部蔵三条西家本) 旧大系本
- ・『新潮日本古典集成(第十三回) 源氏物語 二』(底本、大島本) 集成本
- ・大島本(『大島本 源氏物語 第二巻』大島本)
- ・陽明文庫本(『陽明叢書国書篇 第十六 源氏物語 四』陽明文庫本)
- ・高松宮家本(『高松宮御蔵河内本 源氏物語三 さかき 花ちるさと すま

あかし) 高松宮家本

・保坂本(角川書店『源氏物語』CD-R) 保坂本
(※尾州家河内本は落丁のため確認不可)

墨付四十丁裏(写真B参照)

おりふしおほかり春宮はましてつねにおほしいてつゝしのひてなき給ふを見奉る御めのとまして命婦の君はいみしうあはれに見奉る

入道の宮は東宮の御事をゆかしうのみ

おほし、に大將もかくさすらへ給ぬるをいみしうおほしなける御はらからのみこたちむつましう聞え給しかむたちめなどはしめつかたはとふらひ聞え給なとありきあはれなる文をつくりかはしそれにつけても世中にのみめてられ給へはきさいの宮きこしめ

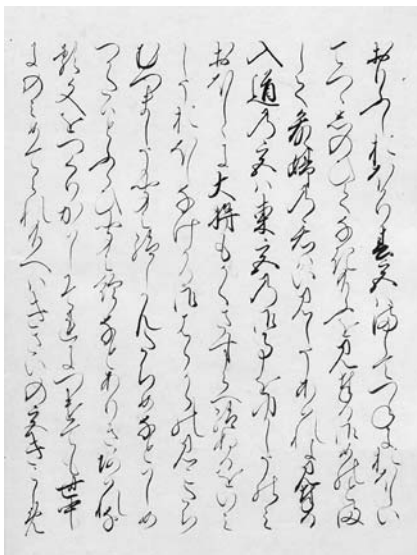


写真 C 須磨 墨付四十丁裏

光源氏は須磨に退去し、わびしい生活を送っていた。一方都では、宮中の者たちが光源氏を恋しく思っていた。次の場面は、光源氏という後見人を失った東宮を、

藤壺が案じている内容である。

該本波線部に相当する諸本の本文は、次の通りである。

全集本

入道の宮は、春宮の御事をゆゆしうのみ思ししに

新大系本

入道の宮は、春宮の御事をゆゝしうのみおほししに

旧大系本

入道の宮は、春宮の御事を、ゆゝしうのみ思し、に

集成本

入道の宮は、春宮の御ことをゆゆしうのみおほししに

大島本

入道の宮は春宮の御事をゆゝしうのみおほししに

陽明文庫本

入道の宮も春宮の御事をゆゝしうのみおもほすに

高松宮家本

入道の宮は春宮の御ことをゆゝしうのみおもほすに

保坂本

入道宮は春宮の御事をゆゝしうのみおほし、に

太字に記したとおり、ほとんどの諸本で「ゆゆしう」となっている箇所が、該本では「ゆかしう」となっている。よって当箇所を独自本文として見なし、諸本にある「ゆゆしう」を考察するとともに、該本の「ゆかしう」の独自解釈を試みたい。

まず、大島本を底本としている全集本の訳を参考に考察してみる。全集本も同様に太字部分を「ゆゆしう」と記しているので、訳は「入道の宮は、東宮の御身の上に忌まわしいことが起こりはせぬかと、そのことばかりご心痛でいらつしやうと

ころ」としている。ここの「ゆゆしう」の訳には「忌まわしいことが起こりはせぬかと」と充てているようである。

『角川古語大辞典¹¹⁾』で「ゆゆし」を引いてみると、

1. 神聖であるさま。また、おそれつつしまれるさま。おそれおい。
2. 不吉であるさま。
3. いとわしく思うさま。避けなくなるさま。また、そのような思いをもたらすほどにはなはだよくないさま。
4. 程度がはなはだしいさま。不気味に感じるほどの意でいう表現から生じたもの。
5. みごとであるさま。すばらしい。

とある。つまり2の「不吉であるさま」を「忌まわしいこと」として、文中に合うように意識しているのであろう。この「忌まわしいこと」について全集本は、「東宮が、出生の秘密の露頭によりその地位を失いはせぬかと不安に思う。」と説明し、¹²⁾その根拠に同じく須磨の巻の以下の場面を挙げている。

明日とての暮には、院の御墓拝みたてまつりたまふとて、北山へ参でたまふ。暁かけて月出づるころなれば、まづ入道の宮に参でたまふ。近き御簾の前に御座まゐりて、御みづから聞こえさせたまふ。春宮の御事を、いみじううしろめたきものに思ひきこえたまふ。かたみに深きどちの御物語はた、よろづあはれまさりけんかし。

光源氏が須磨へ退去する前に、藤壺の宮のもとへ参上した場面である。¹³⁾傍線部を「東宮の御事を、たいそう気がかりなことに思い申しあげていらつしやる。」と訳し、ほぼ該当部分と同義であることがわかる。しかし、前の「ゆゆしう」ことが、ここでは「うしろめたきもの」となっている。『角川古語大辞典』によると、「うしろめたし」は

1. 他に關して用いて、そばで見守ることのできない現在の状況や、その将来に不安を感じ、気がかりに思う氣持を表す。心もとない。

2. 他人の性格や行動に関して不信任感を持つさま。気が許せない。
3. みずからに關して、良心の呵責を感じるさま。うしろぐらい。この用い方は中世以降にふえる。

という意味であり、本文で「気がかりなこと」と訳しているのも頷ける。

さらに、同じように藤壺が東宮のことを心配している場面は、須磨の巻の中でも一ヶ所見つけることができた。須磨に居る光源氏から送られてきた手紙に対して、藤壺が返事を出す場面である。¹⁴⁾

入道の宮にも、春宮の御事により、思し歎くさまいとさらなり。御宿世のほどを思すには、いかが浅くは思されん。

傍線部の訳は、「入道の宮も、東宮の御事のためにお嘆きあそばすご様子は、まったく言うもさらなることである。」とあり、「思し歎く」につけられた頭注二三には「藤壺は東宮の地位が安泰でありうるかという不安を抱きながら、後見人である光源氏の失脚を歎く。」と書かれている。前に挙げた二例とはほぼ同じ内容であることは明確であろう。つまり、藤壺は東宮の出生に關して何度も何度も懸念を繰り返していたことが分かる。出生の秘密が漏えいすることによって、東宮に何かしらの影響が出ることをひたすらに心配しているのである。その何かしらの影響こそが、「ゆゆしう」で訳された「忌まわしいこと」なのであるう。

しかし、「忌まわしい」だけならまだしも、全集本での訳にあたる「東宮の御身の上に忌まわしいことが起こりはせぬか」までを、「ゆゆしう」という単語のみで表していると本当に言えるのか。次は、『源氏物語』全体で「ゆゆし」という単語がどのように使われているのか、古注釈や他の巻にも目を向けて調べていきたい。

『岷江入楚』¹⁵⁾と『湖月抄』¹⁶⁾には、以下のような注釈が付けられていた。

幾聞藤壺の御心に冷は源と忍ひたる事のあるをいか、とあやうくおほすに源のかやうにおはすればされはよとおほして冷もいか、おはせんすらんと恐怖ある也

(『岷江入楚』 十二 須磨)

師 源氏の御子なればいかがと御心のおにおほしに、源氏のかかる事ましますにつけて、いよいよおほしなげき給ふ也。

(『湖月抄』 須磨)

このふたつの注からも、藤壺が以前から東宮のことを光源氏の子であるが故に気にかけていたということ、そして光源氏の須磨退去を受けてその不安がさらに大きくなったことが読み取れる。全集本などの注釈も、この古注釈の流れを汲んでいると言えるだろう。

次に、全集本『源氏物語』の中で「ゆゆし」という単語が何ヶ所使われているかを調べたところ、計一〇六ヶ所の使用例を見つけることができた。その中で該当箇所と同様に「不吉だ」「忌まわしい」というマイナスの意味として取れるものは計六十五ヶ所、それ以外は「不吉なほどに美しい」というプラスの要素として使われているものが多く見られた。¹⁷⁾ その中でも、該当箇所と限りなく近いと思われる本文は、賢木の巻で、出家を決意した藤壺が、こっそりと宮中に参内して東宮に最後の暇乞いを申し上げる場面である。¹⁸⁾

(前略) 大后の御心もいとわづらはしくて、かく出で入りたまふにもはしたなく、事にあれて苦しければ、宮の御ためにもあやふくゆゆしうよろづにつけて思はし乱れて、

藤壺が、東宮の身を心配する胸中の内容である。全集本の頭注一六には「東宮が廃されるかもしれないと危ぶむ気持。」とあり、光源氏の須磨退去によって東宮の地位を危惧していた藤壺の胸中と非常によく似ていると言える。

以上の点から、大半の諸本にあったように「ゆゆしう」として意味をとることは可能であると考えられる。

では、ここからは該本の独自本文について考察を進めていく。
まず、『角川古語大辭典』で「ゆかし」という単語を調べると、

1. 文脈に応じて、見たい、知りたい、聞きたい、などの気持を表す。
2. 転じて、慕わしい。なつかしい。
3. なんとなく気品がある。情趣はある。

と訳されている。そして『源氏物語』全巻の中で「ゆかし」または「ゆかしさ」「ゆかしがる」という単語が使われているのは計一二三ヶ所、その内のほとんどが1の「見たい、知りたい、聞きたい」の意味で使われている。該本は「東宮の御事をゆかしうのみおほし、に」と、「東宮の御事」を「ゆかしく」思っているのだから、1の中でも「知りたい」の意があてはまるだろう。計一二三ヶ所の中で「知りたい」という意味と取れる箇所は一五例、そのうち「様子や状況」を「知りたい」となっている箇所は六例見つかった。この六例のみを以下に挙げる。

- (1) あやしや、いかに思ふらんと、少将の心の中もいとほしく、またかの人の気色もゆかしければ、小君して、「死にかへり思ふ心は知れたまへりや」と言ひ遣はす。(夕顔)
- (2) 藤壺のまかだたまへる三条宮に、御ありさまもゆかしうて、参りたまへれば、命婦、中納言の君、中務などやうの人々対面したり。(紅葉賀)
- (3) 五月五日にぞ、五十日にはあたるらむと、人知れず数へたまひて、ゆかしうあはれに思しやる。(滯標)
- (4) 明石にも、さこそ言ひしか、この御心おきて、ありさまをゆかしがりて、おぼつかかならず人は通はしつ、胸つぶるることもあり、また、面だたしくうれしと思ふことも多くなむありける。(薄雲)
- (5) ものなどのたまふさまをゆかしと思すなるべし。(蛭)
- (6) (前略) 世の中を思ひしづまりたまふらんころほひの御ありさまいよいよゆかしく心もなければ、あるまじきことと思しながら、おほかたの御とぶらひにことつけて、あはれるさまに常に聞こえたまふ。(若菜上)

このように、遠くにいる人物の様子を知りたいと思うときに「ゆかし」が使われる例があるならば、「東宮の御事をゆかしうのみおほし、に」の「ゆかし」を「東宮

のご様子を知りたい」と訳することも可能であろう。また、前述したように、藤壺が東宮の出生に関して懸念していることは今までも何度か記されてきている。そのような東宮の様子が気がかりで、どうしているのか知りたいと思っているさなかに、東宮の後見人である光源氏が須磨に退去したことを嘆いているのであろう。

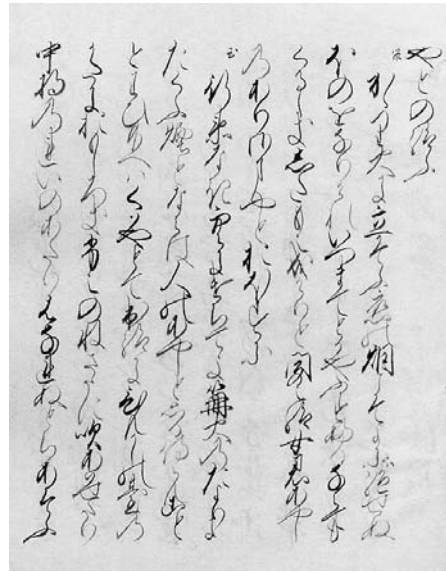
前に例で出した賢木の巻の同場面からも分かるように、藤壺は宮中にいる東宮と一緒に住んでいない。つまり、東宮の様子をすぐに知ることの出来る場所にはいないのである。光源氏を東宮の後見人としたことも、東宮の近くにいられない自分の代わりになってもらうため、そしてその様子を中継的に聞くためでもあっただろう。さらに、須磨の巻ではすでに藤壺は出家をしてしまっている。今まで以上に会うことが難しくなった東宮のため、光源氏の存在は藤壺にとって重要であったはずである。しかし、自分が出家してすぐに、光源氏は須磨に退去してしまう。後見人を失うことで、藤壺は東宮の様子を知る手段をなくしたと言えるだろう。そう考えると、そのあとの「大将もかくさすらへ給ぬるをいみしうおほしなける」、つまり「光源氏もこのように須磨へと流離いなさることをたいそうお嘆きになる」理由も瞭然である。東宮のご様子をひたすらに知りたいと思っていた藤壺は、中継ぎ役であった光源氏の退去を嘆いたのである。

以上のことから、該本の「東宮の御事をゆかしうのみおほし、に」という本文は、「東宮のご様子をただ知りたいとお思いになつていたが」と訳することが可能であり、意識が必要であった「ゆゆし」よりも、「知りたい」と訳すことのできる「ゆかし」のほうが、より簡潔に読むことができると思われる。

四、篝火の巻

該本の篝火の巻は、二折で、一折目も二折目も二枚（それぞれ四丁、全八丁）。巻頭に二丁、巻末に二丁の遊紙がある。巻頭二丁目遊紙の中央に、墨流しの題簽があり、「篝火」と書かれている。題簽は、縦六糎、横三糎。墨付は四丁。朱点、朱筆なし。糸を通すところに、同質の紙で補修してある。また、墨付三丁表の二行目

と六行目の和歌の冒頭に、光源氏と玉鬘の略称である、「源」と「玉」という詠者名がそれぞれ書かれている。書写者と同筆と考えられる（写真D参照）。



写真D 篝火 墨付三丁表

まず、該本を翻刻し全集本の本文を比較したところ、七ヶ所の本文異同があった。これら大半のものが強調や助詞の有無の違いであった。それらの中でも本文の解釈にかかわるであろう、

- ① 墨付一丁裏二行目「なれたてまつらましかは」
 ② 墨付二丁裏五行目「ありて」

について考察・検討していきたい。

また、今回の篝火の巻の考察で使用した現行の注釈書や諸本を先に挙げておく。

- ・『新編日本古典文学全集22 源氏物語③』（底本、大島本）全集本
- ・『新日本古典文学大系21 源氏物語三』（底本、大島本）新大系本
- ・『日本古典文学大系16 源氏物語三』（底本、書陵部蔵三条西家本）旧大系本
- ・『新潮日本古典集成（第十三回） 源氏物語四』（底本、大島本）集成本

- ・大島本（『大島本 源氏物語 第五巻』）大島本
- ・尾州家河内本（『尾州家河内本源氏物語 第五巻』）尾州家河内本
- ・陽明文庫本（『陽明叢書国書篇 第十六 源氏物語 七』）陽明文庫本
- ・保坂本（角川書店『源氏物語』CD-R）保坂本

① 墨付一丁裏二行目（写真E参照）

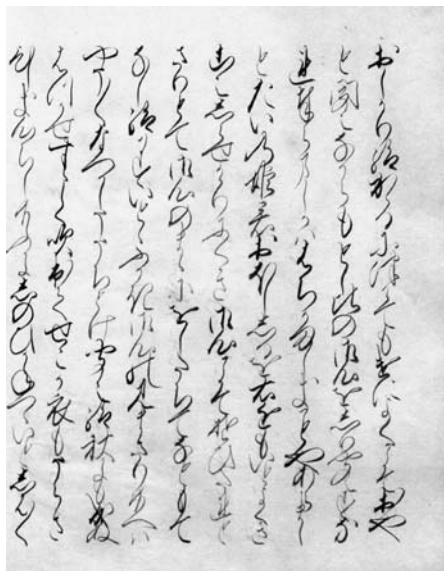
おしかり給わるにつけてもけによくこそおや
 と聞こえなからもとし頃の御心をしり聞すな

なれたてまつらましかははちかましきことやあらまし
 とたいの姫君おほしるをうこんもいとよくき

こえしらせけりにくき御心こそ添ひたれと
 さりとて御心のままにをしたちてなともて

なし給わすいとふかき御心のみまさり給へは
 やうやうなつかしううちとけきこえ給秋にも成ぬ

はつかせすすしく吹きてせこ衣もうらさ
 ひしき心ちし給ふにしのひかねつといしはしは



写真E 篝火 墨付一丁裏

光源氏は玉鬘を自分の養女として養育した。その玉鬘の母親は光源氏のかつての逢瀬の相手、夕顔である。夕顔には、頭中将との間に儲けた娘がおり、その娘が玉鬘である。夕顔の死後、玉鬘は乳母とともに筑紫へ下向したが、玉鬘が二十歳の頃、再び都に戻ってきた。その際、光源氏に見出されたのである。一方、内大臣は息子の柏木が探し出してきた近江の君を娘にした。近江の君は、双六に熱中し、早口で話すなど姫君らしくない人物であった。近江の君に苦慮した内大臣は、娘の弘徽殿女御の元へ仕えさせた。しかし、近江の君は歌の心得もなくおかしな和歌を歌い人々の嘲笑を買った。そんな近江の君の噂を聞いた光源氏は、内大臣の配慮のなさを批判するところから二十七帖の篝火の巻が始まる。この場面は、近江の君の噂を聞いた玉鬘が改めて光源氏の思慮深さに安堵するところである。

該本波線部に相当する諸本の本文は、次の通りである。

全集本

年ごろの御心を知りきこえず、馴れたてまつらましに、恥ぢかましきことやあらまし

集成本

年ごろの御心を知りきこえず、馴れたてまつらましに、はぢかましきことやあらまし

旧大系本

年ごろの御心を知りきこえずなれたてまつらましに、恥ぢがましき事やあらまし

新大系本

年ごろの御心を知りきこえず馴れたてまつらましに、はぢかましきことやあらまし

大島本

としごろの御心をしりこえずなれたてまつらましにはちかましきことやあらまし

陽明文庫本

としごろの御心をしりきこえずなれたてまつらましにはちかましきことやあらまし

保坂本

としごろの御こゝろもしりきこえずなれたてまつらましにはちかましきことやあらまし

尾州家河内本

としごろの御心をしりきこえずなれたてまつらましにはちかましきことやあらまし

『源氏物語大成』¹⁴⁾によると、國冬本のみが該本と同じ「なれたてまつらましかは」となっている。全集本の「年ごろの御心を知りきこえず、馴れたてまつらましに、はぢかましきことやあらまし」について訳は、「(内大臣の)昔からのご気性も存じあげずに、もしもおそばにまいったとしたら、(近江の君のように)恥ぢかしい目にあいもしたであろう。」と、反実仮想を用いた訳となっている。また、全集本以外の他本の解釈をみると旧大系本頭注には全集本と同じように「もし御なじみ申すならば」と訳をしている。

しかし、全集本の訳と旧大系本頭注は、接続助詞の「に」の意を考えると、「もしもおそばにまいったとしたら、(近江の君のように)恥ぢかしい目にあいもしたであろう。」と反実仮想を用いて訳するのはふさわしくないであろう。

まず、『角川古語大辞典』で「に」を引いてみると、

1. 格助 体言または体言相当の語に付き、連用文節を作る。時間的・空間的・心理的な一点を指示すること。

2. 接助 活用語の連体形に付いて、ある状況を示し、後句との間に種々の意味関係を構成して用いられる。

とある。以上から、「に」は助詞で格助詞と接続助詞の二つの役割を持っている。そして、この場面の接続助詞の「馴れたてまつらましに」であるが、直後に「恥ぢがまし」の連体形「恥ぢかましき」が表記されているため、順接の「に」と考える

のが適切である。よって、「〔内大臣の〕昔からの性格も知らずに、おそばにまいつたら、私も（近江の君）のように恥を聞いたかもしれない」となる。玉鬘が「内大臣の性格を知らずに慣れ親しんだら」と、玉鬘自身も近江の君のように恥を聞いたかもしれないであろう原因・理由に直接かかると考えるのが適切である。以上から、全集本と旧大系本の訳は該本の本文の方がふさわしいと言える。

該本の「なれたてまつらましかはちかましきことやあらまし」は反実仮想「ましかばまし」の構文である。よって、「もしもおそばにまいったとしたら近江の君のように恥ずかしい目にあつたであろう。」となる。玉鬘は、内大臣は実の父親ではあるが、「もしも内大臣に引き取られていたら、近江の君のように世間の噂になつて恥ずかしい思いをしたかもしれない。」と内大臣に引き取られなかったことに安堵している。その感情を反実仮想「ましかばまし」を用いることで、光源氏に引き取られて安堵している玉鬘の様子をより強調しているのではないだろうか。

②墨付二丁表の末行から

いとす、しけなるやり水のはとり

墨付二丁裏

にけしきことにひろこりふしたるまゆみの木
のしたにうちまつおとろくしからぬ程におき
てさししりそきてともしたれば御前のかたは
いと涼しくおしき程なるひかりに女の御ありさ
ま見るにかひありて御くしのであたりなとい
とひややかにあてはかなる心ちしてうちとけ
ぬさまに物をつつましとおもしたるけしきいと
らうたけなりかへりうくおほしやすらふたえ
す人さふらひてともしつけよ夏の月なき程は
庭の光りなきいと物むつかしくおほつかなし

表向きには親子とされる光源氏と玉鬘。夏の御殿の西の対にいる玉鬘のもとを訪ねた光源氏は、琴の指導をし一日過ごした。その後、琴を枕に共に寄り伏し、立ち去ろうとするか逡巡している場面である。

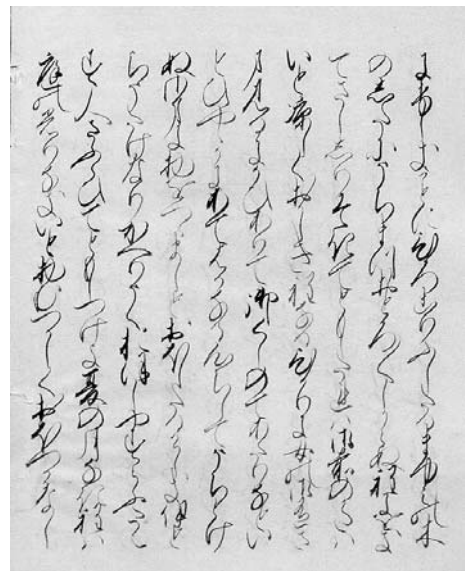


写真 F 篝火 墨付二丁裏

該本波線部に相当する諸本の本文は次の通りである。波線部分のみを引用する。

全集本

いと涼しげなる遣水のほとりに、けしきことに広がり伏したる檀の木の下に、打松おどろおどろしからぬほどに置きて、さし退きて点したれば、御前の方は、いと涼しげをかしきほどなる光に、女の御さま見るにかひあり。御髪の手当りなど、いと冷やかにあてはかなる心地して、うちとけぬさまにものをつつましと思したる気色、いとらうたげなり。

旧大系本

いと涼しげなる遣水のほとりに、けしき殊に、ひろこり臥したる檀の木の下に、打松、おどろくしからぬ程におきて、さししりぞきて、ともしたれば、御前のかたは、いとす、しく、をかしき程なるひかりに、女の御ありさま、みるにかひあり。御髪の手あたりなど、いと、ひや、かに、あてはなる心地し

て、うちとけぬさまに、物を、「つ、まし」とおぼしたる気色、いと、らうたげなり。

大島本

いとす、しけなるやり水のほとりにけしきことにひろこりふしたるまゆみの木のしたにうちまつおとろくしからぬほとにをきてさしりそきてともしたれは御前のかたわいとす、しくおかしきほとなるひかりに女の御さまみるにかひあり御くしのあたりなとひや、かにあてはかなる心ちしてうちとけぬさまにものをつ、ましとおぼしたるけしきとらうたけなり

陽明文庫本

いとす、しけなるやり水のほとりにけしきひろこりふしたるまゆみの木のしたにうちまつおとろくしからぬほとにをきてさし、りそきてふしたれは御まへのかたわいとす、しくおかしきほとのかはひに女の御さまみるにかひあり御くしのあたりなとひや、かにあてはかなるこ、ちしてうちとけぬさまにものをつ、ましとおぼしたるけしきとらうたけなり

保坂本

いとす、しけなるやり水のほとりにけしきみひろこりふしたるまゆみのきのしたにうちまつおとろくしからぬほとにをきてさしそきてともしたれはおまへのかたわいとす、しくおかしきほとのほかけにをんなの御ありさまみるにかひあり御くしのあたりなとひや、かにあてはかなる心ちしてうちとけぬさまにものをつ、ましとおぼしたるけしきとらうたけなり

尾州家河内本

いとす、しけなるやり水のほとりにけしきみひろこりたるまゆみの木の下にうち松おとろくしからぬほとにをいてさしそきてともしたれは御前のかたわいとす、しくおかしきほとのほかけに女の御さま見るにかひあり御くしのあたりなとひや、かにあてはかなる心地してうちとけぬさまに物をつ、ましとおぼしたるけしきとらうたけなり

該本の波線太字部分「見るにかひありて」は、全集本では「見るにかひあり。」

となっている。右に示したように他本でも同様で、独自本文であると考えられる。

「女の御ありさま見るにかひありて御くしのあたりな」とあるように、助詞の「て」が入ることで、「いとす、しけなるやり水のほとり」から「いとらうたけなり」までが一文になる。そして「いとらうたけなり」には「かへりうくおほしやすらふ」と光源氏の心中について書かれた文章が続く。「思しやすらふ」という光源氏に対する敬語表現が使われており、語り手の存在が意識される構成となっている。『源氏物語』は、主に女房視点という形式で描かれている。だが、榎本正純は「源氏物語の視覚」において、「源氏物語の作者は作中人物の〈眼＝視点〉を重要視し、〈語り手〉の視点を結果的に補足しているわけである。」と指摘している。加えて同氏は、「源氏物語の意匠―源氏物語の視覚性を中心に―」の中で、「源氏物語には、このように語り手あるいは読者（きき手）と、作中人物とが重なり、作中人物の眼をおのが眼とする、そのような描き方が随所に見られ」と述べている。この場面も作者の視点を描くと同時に、光源氏の視点であると考えられる。村井利彦は「檀の木の下―源氏物語篝火管見―」において、「けしきことに広がり臥したる檀の木」について、「光源氏の視線をたどって近くで見ると」と述べており、この場合、檀の木を見つめる視線が光源氏のもつと分かる。また、該本の「御くしのあたりなとひや、かにあてはかなる心ちして」という玉鬘の髪に触れた感触についての表現も、光源氏の視覚を通して描かれていると考えられよう。

以上に加え、『源氏物語』の作者である紫式部は「視覚型の作家」と評されていることも踏まえ、該本の「いとす、しけなるやり水のほとり」から「いとらうたけなり」までの一文の解釈を考えてみたい。前述した通り、他本では「あの御さま見るにかひあり」で文が終わり、玉鬘の美しさに焦点が合ったところで一度区切れる。該本では、「見るにかひありて御くしのあたりな」となっており、接続助詞の「て」が入っている。

『角川古語大辞典』接続助詞「て」を引いたところ、

1. 時間的に継続する事態、または空間的に共存する事態を並列する。
2. 二つの事態の因果関係、または対立関係を単純に示す。

3. 修飾句として、状態・手段・方法などを表す。

4. 補助動詞「あり」「侍り」「候ふ」などに続いて、一つの動作の継続や状態を表すのに用いられる。

該本では、「女の御ありさま見るにかひありて」に「御くしのであたりな」とひやかかにはかなる心ちして」と続いていることから、2の因果関係を示している」と解釈するのが妥当である。「て」が入ることで「見るにかひあり」と思ったからこそ、つまり玉鬘の様子が美しいから髪に触れたという因果関係が浮かび上がる。髪を撫でるという行動は、玉鬘の美しさに起因しており、該本では、玉鬘に惹かれる光源氏の感情の高まり、そして玉鬘の優美さが強調されることとなる。

また該本の場合、玉鬘の隣にいる光源氏の視線は、庭の遣水のほとり、そしてそこに枝を広げている檀の木、その下に置かれた松の割木、御前から隔たれたところに焚かれた篝火、という庭の光景を捉えたのち、部屋の中へと視線が動き、篝火に風情よく照らされ隣に伏せる玉鬘の姿、そしてその美しい姿を見て髪に触れ、再び慎ましい様子の玉鬘自身へと焦点が動く。「て」が入ることで視線の動きが、庭の光景から目の前にいる玉鬘、そして髪を撫で、再び玉鬘を捉える視線の流れが途切れることなくすべて繋がる。光源氏の視覚を追体験する読者にとって、該本のように視線の動きが繋がることで、より滑らかで動的な視覚の表現と感じられる。また視線を玉鬘に向けている中でも、玉鬘のことを「見るにかひあり」と思い、髪に触れ、再び全体を捉えるという視線の動きから、光源氏が玉鬘に向ける視線もより濃密なものとなる。助詞「て」が入ることで、該本ではより情動的な表現となつていると解釈できるのではないだろうか。

今回提示した該本の本文は、本稿で考察・検討したような解釈もできると思われる。今後も、該本についての考究を進めていきたい。

注

- (1) 阿部秋生 秋山虔 今井源衛 鈴木日出男『新編日本古典文学全集 源氏物語(一)』(六) 小学館 一九九四年・一九九八年

(2) この女性は、後に読者によって「夕顔」と呼ばれる女性である。『源氏物語』においては「夕顔」とは呼ばれないが、本稿では便宜上「夕顔」とする。

(3) 池田龜鑑『源氏物語大成』(中央公論社一九八四年)と『源氏物語別本集成』(桜楓社一九八九年)と『源氏物語別本集成続』(桜楓社二〇〇五年)による。

(4) 代表として、全集本の訳を載せた。他の注釈書の訳は、新大系本脚注において「入り交じり咲く花の色はいずれが美しいと区別がつかないけれど、それでも床を敷いて私を待つ、常夏の花であるあなたに及ぶものはないよ。」集成本頭注において「いろいろ咲いている花の色はどれが美しいと区別もつかないけれども、やはり常夏に及ぶ花はないことだ。」となっている。

(5) 今回確認できた古注は、

- ・『源氏釈』(中野幸一『源氏物語古註釈叢刊 第一巻 源氏釈 奥入 光源氏物語抄』武蔵野書院 二〇〇九年)
 - ・『源氏物語奥入』(中野幸一『源氏物語古註釈叢刊 第一巻 源氏釈 奥入 光源氏物語抄』武蔵野書院 二〇〇九年)
 - ・『河海抄』(『河海抄』國學院大學出版部 一九八〇年)
 - ・『花鳥余情』(伊井春樹『源氏物語古註釈叢刊 第一巻 花鳥餘情』桜楓社 一九七八年)
 - ・『種玉編次抄』(中野幸一『源氏物語古註釈叢刊 第四巻 明星抄 種玉編次抄 雨夜談抄』武蔵野書院 一九八〇年)
 - ・『雨夜談抄』(中野幸一『源氏物語古註釈叢刊 第四巻 明星抄 種玉編次抄 雨夜談抄』武蔵野書院 一九八〇年)
 - ・『弄花抄』(伊井春樹『源氏物語古註釈叢刊 第八巻 弄花抄』桜楓社 一九八三年)
 - ・『細流抄』(伊井春樹『源氏物語古註釈叢刊 第七巻 内閣文庫本 細流抄』桜楓社 一九八〇年)
 - ・『明星抄』(中野幸一『源氏物語古註釈叢刊 第四巻 明星抄 種玉編次抄 雨夜談抄』武蔵野書院 一九八〇年)
 - ・『岷江入楚』(中田武司『源氏物語古註釈叢刊 第十一巻 岷江入楚 第一巻』桜楓社 一九八〇年)
 - ・『首書源氏物語』(藤岡忠美『首書源氏物語 帚木空蟬 和泉書院 一九八一年』)
 - ・『湖月抄』(北村季吟『湖月抄 第一冊』平樂寺書店 一九三六年)
 - ・『源注拾遺』(久松潜一『契沖全集 第九巻(第八回配本)』岩波書店 一九七四年)
 - ・『源氏物語玉の小櫛』(大野晋『本居宣長全集 第四巻』筑摩書房 一九六九年)
 - ・『源氏物語新釋』(吉澤義則『校對 源氏物語新釋 卷の二』平凡社 一九三七年)の十五種類である。
- (6) 六種の内、本稿では代表として四種を挙げた。『湖月抄』『源氏物語新釈』については、本文が『雨夜談抄』と同じであるため省略した。

- (7) 『新編国歌大観 CD-ROM版』角川書店 一九九六年
 (8) 『うつほ物語』(中野幸一『新編日本古典文学全集14 うつほ物語(二)』小学館 一九九九年)での「ささましろ」の用例は、

(A) 山、野ゆすり、大空響きて、雲の色、風の声変はりて、春の花、秋の紅葉、時分かず咲きまじるまゝに、遊び人ら、いとど遊びまざるほどに、(以下略) (俊蔭)
 (B) 「あやしく、世の中忘れられ、心ゆくところにこそありけれ。この春夏、ここにて過ぐさむ」とてものをしたまふに、花の色を尽くして咲きまじり、水は糸乱れたるやうに流れ入りて、いとおもしろし。(春日詣)
 の二例である。

- (9) 前号で検証した一丁から二十五丁までには、計五十二ヶ所の異同が見つかった。今回の範囲ではその半分の量となっている。

- (10) 『新編日本古典文学全集21 源氏物語(二)』二〇六頁、六行目より抜粋。

- (11) 『角川古語大辞典 第五巻』(角川書店 一九九九年三月)以降、本書を使用した際も同様である。

- (12) 『新編日本古典文学全集21 源氏物語(二)』二〇六頁の頭注一を参照。

- (13) 『新編日本古典文学全集21 源氏物語(二)』一七八頁、一七九頁より抜粋。

- (14) 『新編日本古典文学全集21 源氏物語(二)』一九一頁より抜粋。

- (15) 中野幸一『岷江入楚 自十二須磨 至廿六常夏』(武蔵野書院 一九八六年五月)

- (16) 湯川松次郎『源氏物語湖月抄上巻』(弘文社 一九二七年)

- (17) この訳は全集本を参考にした。

- (18) 『新編日本古典文学全集21 源氏物語(二)』一一五頁、三、五行目。

- (19) 池田龜鑑『源氏物語大成』中央公論社 一九八四年

- (20) 榎本正純『源氏物語の視覚』(『平安文学研究』一九七五年 十一月号) 平安文学研究会

- (21) 榎本正純『源氏物語の意匠―源氏物語の視覚性を中心に―』(『国語国文』一九七五年八月号)

- (22) 村井利彦『檀の木の下―源氏物語篝火管見―』(『神戸山手短期大学紀要』二〇〇四年 四七号)

- (23) 注20参照。

執筆担当

・「帚木」…竹内彩(博士前期課程二年)

・「須磨」…野見山亜沙美(博士後期課程二年)

・「篝火」…田川千尋(博士前期課程一年)、松木綾子(博士前期課程二年)